

## 大学における新入生支援のための「発達の修学困難 チェックシート10項目版」の開発

松下, 智子  
九州大学基幹教育院

福盛, 英明  
九州大学基幹教育院

一宮, 厚  
九州大学基幹教育院

<https://doi.org/10.15017/1462131>

---

出版情報：健康科学. 36, pp.19-26, 2014-03-25. 九州大学健康科学編集委員会  
バージョン：  
権利関係：

— 原 著 —

大学における新入生支援のための  
「発達の修学困難チェックシート 10 項目版」の開発

松下智子\*, 福盛英明, 一宮 厚

Development of developmental disability check sheet  
for supporting university students at the time of admission

Tomoko MATSUSHITA\*, Hideaki FUKUMORI, Atsushi ICHIMIYA

**Abstract**

We developed developmental disability check sheet (Ddcs), in order to investigate and then support university freshmen having developmental disability. The purpose of this study was to examine the reliability and validity of the check sheet with 10 question items (Ddcs-10). The results of a factor analysis of the Ddcs-10 revealed two subscales of difficulty of making friends and disability of taking lectures. The Ddcs-10 scores were moderately correlated to both of the AQ-J-16 and ADHD-RS-4 scores. In addition, the Ddcs-10 scores were positively related to ratings of psychiatrists and counselors in a direct interview, but there was a limit to find all of students having developmental disorder. We concluded that this check sheet should be used for supporting students' adaptation not for diagnosing developmental disorder.

**Key words:** questionnaire, developmental disability, university students, factor analysis

(Journal of Health Science, Kyushu University, 36: 19-26, 2014 )

## はじめに

近年、大学においても、発達障害ならびにその傾向を有する学生の支援の充実が求められている。2005年4月に施行された発達障害者支援法では、その第8条第2項で「大学および高等専門学校は、発達障害者の障害の状態に応じ、適切な教育上の配慮をするものとする」と明記された。しかしながら、高等教育機関での対応や支援はまだ試行錯誤によるところが大きい。大学での修学と生活は、高校までのそれより自由であり、自らの積極性や臨機応変な対応が求められる。そのため、発達障害傾向を有する学生にとっては「あいまいさの中での混乱」が引き起こされやすく<sup>1)</sup>、対人関係でのトラブルや、学業および就職活動上の失敗などを生じ、身体症状や精神症状のほか引きこもりなどの行動につながる可能性がある。しかし、これまで学業において成果を収め、人間関係や集団生活においても一応の適応ができていた学生では、自分の困難さが発達障害に起因するものであると認識している者は少ないと言われている<sup>1)</sup>。つまり、学生自身に適切な認識と対処能力を期待することが難しく、問題が悪化してからの後手の対応に陥る可能性が少なくないと考えられる。よって、学生の問題が悪化する前の対応が必要であるものの、発達障害傾向を有する学生に対して、早期にどのような支援が有用で可能なのかということは、大学の相談機関における大きな課題の一つである。

九州大学の学内健康管理施設である健康科学センターは平成25年4月にキャンパスライフ・健康支援センターに改組されたが、九州大学では長年にわたって新入生全員を対象とする入学前アンケート調査と、その結果に基づく新入生面接を行ってきた。これは必要な早期の支援を行い、さらにはその後の支援に繋げる目的で行っている。平成23年度からは、発達障害の傾向による修学困難を把握し、支援につなげていく試みを始めた。その際、発達障害ならびにその傾向についての調査に用いる質問紙は、本学で独自に作成して用いることとした。平成21年度に、信州大学において大学生を対象とした発達障害関連の困り感と支援ニーズを把握するための質問紙開発が報告されていたが<sup>2)</sup>、質問項目が多いことや質問内容が本学で従来行っている新入生向け質問紙と重複することなども見られたため、独自のチェックシートを作成することとした。

平成24年度には、発達障害傾向を有する学生が大学生活で遭遇する可能性のある学業や対人関係上の困難について、既存のチェックリスト<sup>3)</sup>や筆者らの相談経験

から、本人が回答する15項目と保護者が回答する5項目を合わせた20項目からなる「発達の修学困難チェックシート Developmental disability check sheet (Ddcs)」を作成した<sup>4)</sup>。このDdcsのうち本人が回答する15項目を因子分析で解析して、第1因子「友人関係を築くことの困難」、第2因子「修学上の不器用さ」、第3因子「過敏・衝動性」の3因子が見出されたが、回答を「はい・いいえ」の2件法で問うものであったため、回答の偏りが非常に大きく、改訂の余地が残るものであった。

そこで、平成25年度は質問項目を選定し直し、「発達の修学困難チェックシート10項目版 Developmental disability check sheet with 10 question (Ddcs-10)」を作成した。また、発達障害を専門とする小児精神科医のアドバイスを元に半構造化面接における質問項目を作成して、新入生面接時の面談において実施し、発達障害傾向の評定を工夫し直した。

本研究は、Ddcs-10を用いた新入生を対象とする支援の試みを通じて、大学における発達障害傾向による困難を抱えた学生の把握や支援についての検討を行うことを目的としたものである。

## 方法

### 1. 調査手続きと対象者

平成25年度の新入生全員2687名に対し、入学前アンケート調査の一つとしてDdcs-10を配布した。そして、回答が得られた2632名(男子1888名、女子744名)のデータについて解析した。質問紙は、紙面上で調査の趣旨と内容、および個人情報として用いることはないという説明を行うもので、回答は署名による同意をしたのちになされたものである。

新入生面接は、発達障害のみならずその他の精神・心理的問題について基準に基づいて来談を歓奨し、これに応じて来談した156名に対して実施した。これらの学生には、口頭で説明して既存の発達障害のスクリーニングに使われる質問紙に回答を求め、さらに、これら質問紙の内容を知らない状態で面接者が半構造化面接を行い、発達障害傾向について印象評定を行った。その結果から、学生を「発達障害傾向なし」、「発達障害傾向あり」、「発達障害傾向強い」の3群に分類した。

### 2. 調査時期

平成25年3月に質問紙を配布し、4月上旬の健康診断時に回収した。新入生面接は5月中旬から下旬にかけて行った。

### 3. 調査内容

### 1) 発達の修学困難チェックシート 10 項目版 (Ddcs-10)

平成 24 年度に作成した「発達の修学困難チェックシート Developmental disability check sheet (Ddcs)」から、項目数の少なかった「過敏性-衝動性」因子の項目を削除し、本人が回答する 10 項目を採用した。また、保護者が回答する 6 項目を加えた 16 項目からなる質問票を作成した。回答方法は、本人が回答する 10 項目については、0：そうではない、1：どちらかと言えばそうではない、2：どちらかと言えばそうである、3：そうである、の 4 件法で回答を求め、それぞれ項目点 (0 点~3 点) を合計したものを「Ddcs-10 合計得点」とした。また、保護者の心配を問う 6 項目については、はい・いいえの 2 件法で問い、はいを 1 点として回答を合計したものを「保護者の心配得点」とした。

### 2) 自閉性スペクトル指数日本版短縮版 (AQ-J-16)

高機能の広汎性発達障害のスクリーニング尺度としての機能とともに、一般人にも存在する自閉性を把握することを意図して作成された性格傾向尺度である自閉性スペクトル指数日本語版 (Autism-Spectrum Quotient Japanese Version; AQ-J) の短縮版 (AQ-J-16)<sup>9)</sup>を用いた。回答方法は、確かに違う、少し違う、確かにそうだ、少しそっだの 4 段階で求め、得点化は前者 2 つを 0 点、後者 2 つを 1 点として (逆転項目あり) 合計し、「AQ-J-16 得点」とした。カットオフは 12 点が適当であるとされている。

### 3) AD/HD Rating Scale-IV 日本語版 (ADHD-RS-IV)

AD/HD を診断する Rating Scale として、DSM-IV の診断基準に準じて作成された ADHD RS-IV 日本語版<sup>9)</sup>を自記式の質問紙として用いた。回答方法は、ないもしくはほとんどない 0 点から非常にしばしばある 3 点の 4 段階評価である。不注意の 9 項目を合計したものを「不注意得点」、多動性-衝動性の 9 項目を合計したものを「多動性-衝動性得点」、すべてを合計したものを「ADHD 合計得点」とした。

## 4. 統計解析

まず、「発達の修学困難チェックシート 10 項目版」の因子分析を行った。まず、すべての質問項目間の polychoric 相関係数を求め、そのうえでこれを距離変数として因子分析 (最尤法) を行い、固有値 1 以上の条件で因子を抽出したうえで varimax 回転を行った。統計解析ソフトは、SAS9.2 を用いた。その後、Ddcs-10 合計得点と因子得点について、AQ-J-16 得点や ADHD-RS-IV 得点との相関分析を行った。また新入生面接での結

果から発達障害の傾向が強いと評定された学生、さらに医療機関で発達障害の診断がなされている学生について、質問紙の回答を分析した。これらの統計解析には、SPSS 21.0J for Windows を使用した。

## 結果

### 1. 「発達の修学困難チェックシート 10 項目版」Ddcs-10 の因子分析と性差

Ddcs-10 の各項目と保護者の心配得点の度数パーセンテージを表 1 に示し、Ddcs-10 合計得点のヒストグラムを図 1 に示す。どの項目も 7 割~9 割の学生が、「そうではない」「どちらかと言えばそうではない」と答えていた。「どちらかと言えばそうである」「そうである」の度数パーセンテージを合わせても 10% 代以下、つまり該当する学生が比較的少ない項目は、「黒板を写しながら、同時に教師の話を聴いて理解することができない」、「急な予定変更などがあると、どうしていいかわからなくなってしまう」、「周囲の人から孤立してしまい、友人ができにくい」、「場の雰囲気を読んでそれに合わせる事ができず、周囲から浮いてしまう」の 4 項目であった。保護者の心配を問うた質問項目では、「いいえ」と答えた度数パーセンテージは「不注意さがひどく、忘れ物や失い物、うっかりミスが目立つ」以外の項目が 9 割以上であった。Ddcs-10 合計得点のヒストグラムでは、すべての項目に「そうではない」と答えた 0 点の者が 396 名おり、全体の 15% 近くに上り、17 点以上の者は全体の約 5% であった。0 点の者以外では、平均値の 7 点を境に左右の小さな山があるような形であるが、10 点以上はなだらかに正規分布曲線に沿うものとなっている。

また、Ddcs-10 質問票の構造を検討するため、因子分析 (最尤法、バリマックス回転) を行った結果、2 つの因子が得られた。因子係数の値が 0.5 以上の質問項目から、第 1 因子「友人関係を築くことの困難」、第 2 因子「修学上の不器用さ」とした (表 2)。「急な予定変更などがあると、どうしていいかわからなくなってしまう」という項目は、のどちらの因子にも関係する項目であった。因子得点は構成する項目点の合計とした。

表 3 に Ddcs-10 の合計得点と 2 つの因子得点、それに保護者の心配得点のそれぞれの平均点と標準偏差を全体と男女別に示し、性差についての t 検定の結果も示す。何れの得点も男性の方が女性よりも得点が有意に高いという結果であった。

表 1-a. 発達の修学困難チェックシート 10 項目版の各項目の回答度数パーセンテージ

質問項目	そうで	どちらかと言え	どちらかと言え	そうである
	はない	ばそうではない	ばそうである	
1. 教師の指示を聞き逃すことや、メモをしないとすぐに忘れてしまうことが多い	32.7	37.1	23.5	6.6
2. 黒板を写しながら、同時に教師の話を聴いて理解することができない	57.2	32.0	8.9	1.9
3. スケジュール管理が苦手で、締め切りを守れないことがとても多い	53.0	31.6	12.5	3.0
4. 二つ以上の作業を同時にこなそうとすると、混乱してしまう	43.1	35.6	17.6	3.7
5. 課題(作文やレポート)をするときに、具体的にやるのが指示されていればできるが、自分で考えなさいと言われると全くできなくなる	33.7	39.2	23.7	3.4
6. 急な予定変更などがあると、どうしていいかわからなくなってしまう	53.7	35.8	9.2	1.3
7. 人と会話することが非常に苦手だ	48.6	31.6	16.6	3.1
8. 人と話す時に何を話していいかわからなくなり、思考が止まってしまう	54.6	30.3	12.9	2.1
9. 周囲の人から孤立してしまい、友人ができていく	56.6	33.3	8.4	1.7
10. 場の雰囲気を読んでそれに合わせるができず、周囲から浮いてしまう	56.4	36.9	5.6	1.1

表 1-b. 保護者の心配の各項目の回答度数パーセンテージ

保護者への質問項目	度数%	
	0:いいえ	1:はい
1. 子どものころから周りに合わせて行動することが非常に苦手である。	97.3	2.7
2. 不注意さがひどく、忘れ物や失物、うっかりミスが目立つ。	85.4	14.6
3. 融通がきかないところがあり、様々な場面で臨機応変に対応できない。	94.9	5.1
4. 自分の考えや気持ちについて説明することが非常に不得意である。	93.0	7.0
5. コミュニケーションをとることが苦手なため、大学で孤立しそうである。	96.0	4.0
6. 乳幼児検診や学校で発達上の問題を指摘されたり、専門機関への相談を勧められたりしたことがある。	99.0	1.0

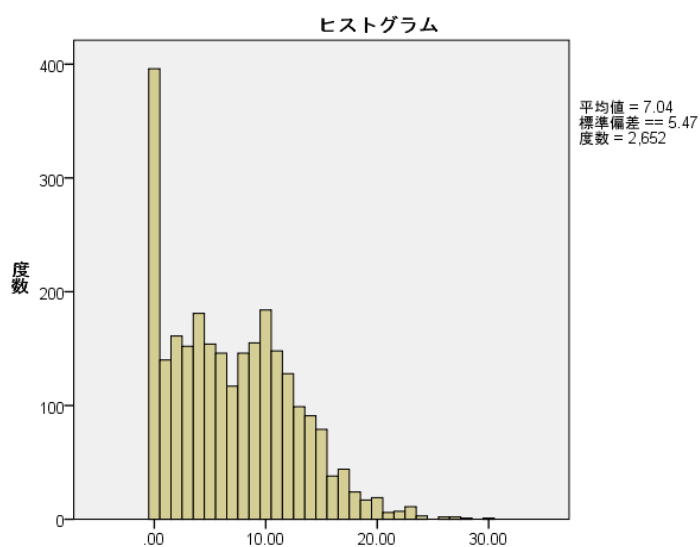


図 1. Ddcs-10 合計得点のヒストグラム

表 2. 発達の修学困難チェックシート 10 項目版の因子分析の結果

因子と構成する質問項目	因子係数
<b>因子1 友人関係を築くことの困難</b>	
7. 人と会話することが非常に苦手だ。	0.88
9. 周囲の人から孤立してしまい、友人ができにくい。	0.87
8. 人と話す時に何を話していかわからなくなり、思考が止まってしまう。	0.84
10. 場の雰囲気を読んでそれに合わせる事ができず、周囲から浮いてしまう。	0.72
6. 急な予定変更などがあると、どうしていいかわからなくなってしまう。	0.52
<b>因子2 修学上の不器用さ</b>	
1. 教師の指示を聞き逃すことや、メモをしないとすぐに忘れてしまうことが多い。	0.78
4. 二つ以上の作業を同時にこなそうとすると、混乱してしまう。	0.75
2. 黒板を写しながら、同時に教師の話を聴いて理解することができない。	0.75
3. スケジュール管理が苦手で、締め切りを守れないことがとても多い。	0.71
5. 課題(作文やレポート)をするときに、具体的にやる事が指示されていればできるが、自分で考えなさいと言われると全くできなくなる。	0.60
6. 急な予定変更などがあると、どうしていいかわからなくなってしまう。	0.58

表 3. 発達の修学困難チェックシートの記述統計および性差の t 検定

	全体	男性	女性	t 値
友人関係の困難得点	3.0(3.0)	3.2(3.1)	2.6(2.8)	4.5 ***
修学上の不器用さ得点	4.6(3.5)	4.8(3.6)	4.2(3.3)	4.1 ***
Ddcs 合計得点	7.0(5.5)	7.3(5.6)	6.3(5.2)	4.7 ***
保護者の心配得点	0.3(0.8)	0.4(0.9)	0.2(0.6)	4.3 ***

\*\*\* p&lt;.001

表 4. 発達障害の診断の有無による t 検定の結果

	診断なし	診断有	t 値
友人関係の困難得点	3.0(3.0)	7.9(4.5)	4.3***
修学上の不器用さ得点	4.6(3.5)	10(4.9)	4.1 ***
Ddcs-10 合計得点	6.9(5.6)	16.3(8.4)	4.4 ***
保護者の心配得点	0.3(0.8)	2.7(1.8)	3.5 *

\* p&lt;.05      \*\*\* p&lt;.001

## 2. 発達障害の診断を有する学生の Ddcs-10 の得点

平成 25 年度の入学前アンケートでは、発達障害の既往がある者が 7 名いた。「発達の修学困難チェックシート 10 項目版」の各得点について、発達障害の診断の有無で t 検定を行ったところ、診断ありの学生の得点は、診断なしの学生に比べ、いずれも有意に高かった (表 4)。ただし、詳しい内訳を見ると、診断ありの学生では、Ddcs-10 合計得点が 21 点や 28 点の高得点の者がいる一方で 1 点や 11 点の者もあり、保護者の心配得点でも 4 点や 5 点の高い者がいる一方で 0 点もしくは 1 点の者もいた。また、それぞれの学生で該当する項目が異なっており、ひとりも該当しない項目はなかった。なお、診断ありの 7 名中、Ddcs-10 得点の今年度の呼び出し基準 (Ddcs-10 合計得点 20 点以上、保護者の心配得点 4 点以上、保護者への質問「乳幼児健診や学校で発達上の問題を指摘されたり…したことがある」にハイと答えた者) に該当したものは 4 名であり、残りの 3 名は該当していなかった。この 3 名は発達障害の診断既往にチェックがついていたために呼び出し対象にはなっていた。

## 3. Ddcs-10 の得点と AQ-J-16 得点と ADHD-RS-IV 得点との関連

新入生面接に参加した 156 名のデータを用い、Ddcs-10 の得点と AQ-J-16 得点、ADHD-RS-IV 得点との間の相関を検討するために、Pearson の相関係数を求めた。その結果、Ddcs-10 の得点と AQ-J-16 得点、ADHD-RS-IV 得点との間に、それぞれ有意な相関が見られた (表 5)。友人関係の困難得点は AQ-J-16 得点や ADHD の不注意得点との間に中程度の相関、ADHD 合計得点との間に弱い相関が見られた。修学上の不器用さ得点と Ddcs-10 合計得点は、AQ-J-16 得点と不注意得点、ADHD 合計得点との間に中程度の相関、多動-衝動性得点との間に弱い相関が見られた。保護者の心配得点は、AQ-J-16 得点と ADHD の不注意得点、ADHD 合計得点との間に弱い相関しか見られなかった。

## 4. 面談により評価した発達障害傾向の強さと Ddcs-10 の得点、AQ-J-16 得点と ADHD-RS-IV 得点との関連

新入生面接に参加した 156 名には半構造化面接を実施し、発達障害の傾向について印象評価を行った。その結果、「発達障害傾向強い」が 18 名 (診断有の 7 名を含む。うち 1 名は新入生面接以前に既に相談につながっていたため新入生面接では面談をしていない。)、 「発達障害傾向あり」は 40 名、「発達障害傾向なし」は 98 名と判断された。Ddcs-10 合計得点から新入生面

接に呼び出しをかけて来談した 86 名をみると、発達障害傾向が強い、もしくは発達障害傾向ありと判断した学生は 58 名であったことから、Ddcs-10 合計得点で 7 割の者が把握できていたということになる。しかし、残りの 3 割は、発達障害傾向は見られず、Ddcs-10 合計得点は発達障害傾向以外の要因に起因して高くなることがあると言える。友人関係や学習に対する自信のなさや不安が回答に影響している可能性がある。

次に、発達障害の傾向についての印象評価の 3 群を独立変数として、Ddcs-10 の得点、AQ-J-16 得点、ADHD-RS-IV 得点を従属変数とする一元配置分散分析を行った。その結果、いずれの得点においても、印象評価の 3 群による有意な主効果が見られた (表 6、図 2)。post-hoc 解析として Tukey の方法を用いて 3 群比較をした結果、友人関係の困難得点、修学上の不器用さ得点、Ddcs-10 合計得点、AQ-J-16 得点、ADHD 合計得点と不注意得点においては、「発達障害傾向なし」群は「発達障害傾向あり」群と「発達障害傾向強い」群とに対してそれぞれ有意な差が見られた (いずれも  $p < .01$ )。保護者の心配得点でも、「発達障害傾向なし」群は「発達障害傾向あり」群 ( $p < .01$ )、「発達障害傾向強い」群 ( $p < .05$ ) と差が見られ、多動-衝動性得点では、「発達障害傾向なし」群と「発達障害傾向強い」群の間にのみ有意な差が見られた ( $p < .01$ )。

## 考察

今回作成した Ddcs-10 からは、前回<sup>4)</sup>と同様、友人関係を築くことの困難さと、修学上の不器用さの 2 つの因子・尺度が見出された。Ddcs-10 の得点は、高機能自閉症や ADHD を評定する質問紙の得点と中程度の相関が見られたことから、Ddcs-10 によって発達障害傾向を有する学生把握の可能性が示唆された。筑波大学でも Ddcs-10 を用いた試みが行われ、Ddcs-10 合計得点に基づき学生を呼び出すという新入生面接を行った結果、発達障害の傾向があり、これまでの学生生活で困難を感じていた学生も含まれていたことが報告されている<sup>9)</sup>。当学の従来の新入生面接では、不安や抑うつ度合いや既往歴、相談希望などの呼び出し基準を用いてきたが、今後も Ddcs-10 も呼び出し基準として、発達障害傾向による大学生活での困難を把握する必要があると思われた。

表 5. Ddcs-10 の得点と AQ-J-16 得点と ADHD-RS-IV 得点との相関

	AQ-J-16 得点	不注意	多動-衝動性	ADHD 合計得点
友人関係の困難得点	0.49 ***	0.43 ***	0.20*	0.38 ***
修学上の不器用さ得点	0.43 ***	0.61 ***	0.28 **	0.54 ***
Ddcs-10 合計得点	0.50 ***	0.58 **	0.26 **	0.52 **
保護者の心配得点	0.20 *	0.26 **	0.14	0.25**

\* p<.05                      \*\* p<.01                      \*\*\* p<.001

表 6. 発達障害傾向の強さと各尺度との分散分析結果

	発達障害傾向なし	発達障害傾向あり	発達障害傾向強い	F 値
友人関係の困難得点	6.6(3.8)	9.2(3.0)	9.9(2.8)	11.8***
修学上の不器用さ得点	7.2(4.4)	10.4(3.2)	11.1(3.9)	12.2***
Ddcs-10 合計得点	12.7(6.9)	18.1(4.6)	19.2(4.9)	15.3***
保護者の心配得点	1.3(1.6)	2.3(2.1)	2.5(2.0)	7.0**
AQJ-16 得点	6.6(2.3)	8.4(2.4)	9.5(2.2)	15.3***
不注意得点	6.1(4.5)	10.1(5.5)	12.6(6.4)	21.4***
多動性-衝動性得点	2.4(3.1)	3.8(3.1)	5.4(5.1)	6.8**
ADHD 合計得点	8.4(6.3)	14.8(7.5)	18.0(11.0)	19.9***

\*\* p<.01                      \*\*\* p<.001

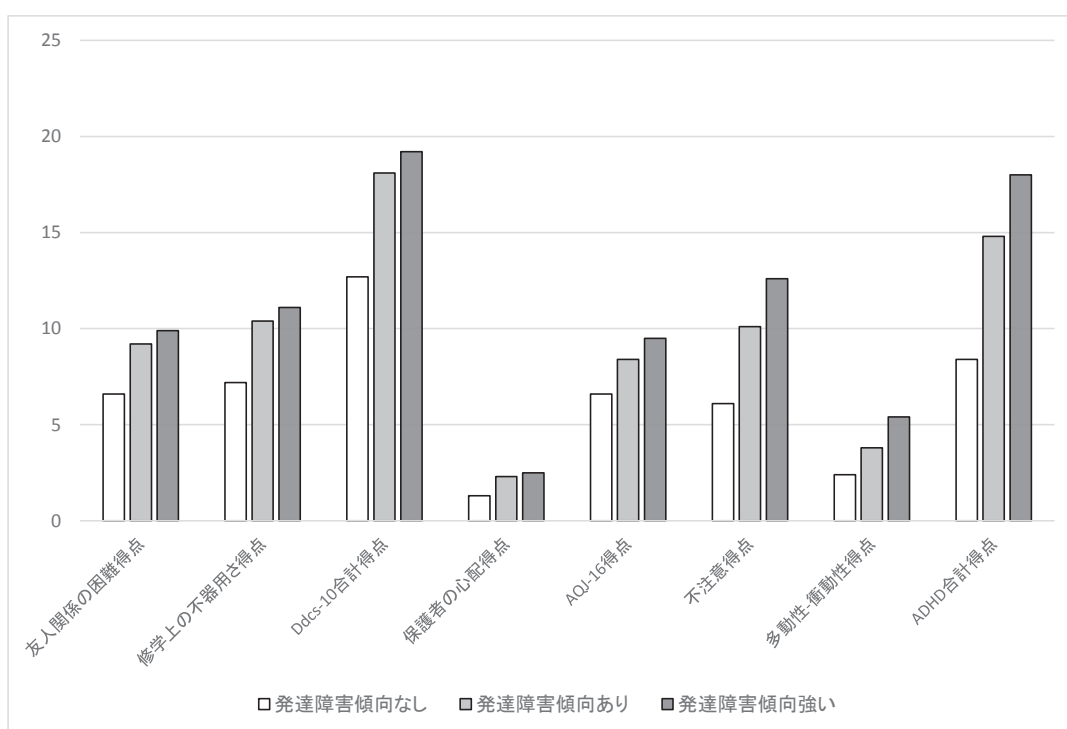


図 2. 発達障害傾向の強さ 3 群における各尺度得点



また、入学までに発達障害の診断を受けた学生では、他の学生に比べて Ddcs-10 合計得点が高かったものの、合計得点が平均値以下の者もあり、このチェックシートのみならず、保護者の心配を併せても、発達障害傾向の強い学生全てを把握することは困難であることも明らかとなった。つまり、本人および保護者への質問紙では捉えられない発達障害傾向を持つ学生がいる可能性があり、これは質問紙による調査の限界とも言える。

信州大学で作成された「発達障害関連困り感質問紙」においても、援助を求めている学生がいることが明らかになっており、質問紙法による調査の限界が示唆されている<sup>8)</sup>。発達障害傾向により学業や対人関係、生活上に何らかの問題が起こっていても、本人がそれほど困っていなかったり、その問題の原因を客観的に把握できていなかったりする可能性があると思われる。発達障害傾向を有する学生における自記式質問紙や自発来談の困難を示唆しているものと思われる。

新入生面接での発達障害傾向の印象評価との関連でも、Ddcs-10 の得点は、AQ-J-16 得点や ADHD-RS-IV 得点と同様に、発達障害傾向の程度により有意な差が見られたものの、発達障害傾向が強い群と傾向あり群との間には差が見られなかった。これは、より詳細な半構造化面接や質的なやり取りを通してしか把握できない面があることを示しており、他の質問紙項目や丁寧な面談での把握のみならず、低年次の必須科目や実技科目における教員と連携することが、支援体制を構築していく際には不可欠であると言えよう。

小学生の ADHD 傾向の高い児童はそうでない児童に比べ、自尊感情が低いことが明らかになっている<sup>9)</sup>。発達障害傾向による生きづらさや自尊感情の低さを抱えながらも、学業を頑張り、将来への希望をつないで大学に進学してきた学生に対して、大学ではどのような支援が望まれるのだろうか。高石(2012)<sup>10)</sup>は、大学生という心身の一応の発達期を終えた十八歳以上の学生を対象とする教育の場において、「発達障害」という視点を導入することは、思春期までの子どもについて考えるのとは異なった意義と留意すべき点を持っているはずであると述べている。

発達障害傾向のある学生を把握する試みは、学生の成長を支えるためのものであり、偏った見方を助長し学生の可能性を阻害するものであってはならない。学生が、大学生活の中で必要な援助を求められるようになるための最初の機会として実施している新入生面接を拡充し、発達障害の傾向を有する学生の支援を行う

ために、引き続き Ddcs-10 を用いていく予定である。

## 謝辞

新入生面接における半構造化面接の質問項目について、アドバイスをいただいた九州大学病院子どものこころの診療部特任教授・吉田敬子先生に御礼申し上げます。

## 参考文献

- 1) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 (2007): 発達障害のある学生支援ガイドブック. ジアース教育新社.
- 2) 山本都実, 高橋知音 (2009): 自閉症スペクトラム障害と同様の行動傾向を持つと考えられる大学生の支援ニーズ把握の質問紙の開発. 信州心理臨床紀要, 8: 35-45.
- 3) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 (2009): 発達障害のある学生支援ケースブック. ジアース教育新社.
- 4) 松下智子, 福盛英明, 一宮厚 (2012): 「発達の修学困難チェックシート」を用いた発達障害傾向を有する学生の早期発見の試み. CAMPUS HEALTH, 49(4): 105.
- 5) 栗田広, 長田洋和, 小山智典, 金井智恵子他 (2004): 自閉性スペクトル指数日本語版 (AQ-J) のアスペルガー障害に対するカットオフ. 臨床精神医学, 33(2): 209-214.
- 6) 山崎晃資, 小石誠二, 朝倉新, 大屋彰利他 (2002): 注意欠陥/多動性障害の評価尺度の作成と判別能力に関する研究. 平成 12 年度厚生省精神・神経疾患研究委託費による研究報告集.
- 7) 寺島瞳, 杉江征, 島田直子, 中岡千幸 (2013): 発達の修学困難チェックシートおよび UPI を用いた新入生呼び出し面接の試み. 全国大学保健管理研究集会抄録集.
- 8) 山崎勇, 高橋知音, 時田真美乃, 鈴木彦文, 不破泰 (2013): 発達障害関連困り感質問紙と UPI-RS 短縮統合版質問紙と援助要請行動との関連. 全国大学保健管理研究集会抄録集.
- 9) 松本陽子, 山崎由可里 (2007): 小学生における ADHD 傾向と自尊感情. 和歌山大学教育学部紀要, 教育科学, 57: 43-52.
- 10) 高石恭子, 岩田淳子(編) (2012): 学生相談と発達障害. 学苑社.